

表 5-45 集団移転後の生活で楽しみにしていること(自由記述)

〈近所付き合い〉

- ご近所さんが以前とはちがうので楽しみでも有り、不安でもあります。以前の家とはちがうのでそれは楽しみです。以前は古家でしたので。
- 色々なイベントがあれば楽しいかな。朝の体操、いも煮会、ウォーキング
- どうしたら良くなるか、どうしたら住みよくなるか、人間関係がうまくやれそうか？家を建てた後のことが不安
- 以前のコミュニケーションを取り戻したい、昔の仲間と楽しく暮らしたい
- ご近所がほとんど顔見知りなので、あまり心配することがない。親しい友人も知覚にいる。

〈家族と暮らせる〉

- 早く自分たちの家で家族と過ごしたいです。孫達が遊ぶ様子を見たい。
- 長男家族と同居。近所で茶飲み。広い住宅での生活。
- もう老齢にて、はっきり云って、たのしみ(?) あまり期待感を持ってないが、息子達、孫達と一つ屋根の下にて暮らせる事は、互いに助け合い(負担をかける方かな)、力強く、うれしい事でもある。

〈新しい住宅〉

- 今より広い部屋で生活し不便が減る嬉しさ
- 新しい住宅
- 子供がどんな家を建てるか楽しみです
- 新しい家が楽しみです。

〈その他〉

- 少しでも良い暮らしが出来る楽しい町として住みたい
- 現時点でイメージが出来ていない
- 庭木を育てる

表 5-46 集団移転後の生活で不安なこと(自由記述)

<近所付き合い>

●新しい集落の中でのコミュニケーション

●近所になる人との関わり、子供達が学校に通う通路の確保、交通の便

●隣にどんな方がくるかわからないので。

●近所付き合いについて

●今までの事と変わるので、隣、近所

<交通の便>

●買い物など車の行き来、近い人との付き合い

●子供の BRT、通学バス停が遠いのでは？近所付き合いが上手くいくか？

●集団移転地が徐々に進む中に思いついた事。当初過疎地にて 29 年度、小泉中は津田中と合併なる様、孫(女)が中 1 となる。はて？どの道を通えば？どちらも山道。45 号線にも遠くなる。我が家では送迎も難しい。それがとても心配。売店が出来るのか、販売車が今迄通り来てくれるのか。山下ろしが相当強いだろうと。更地は芝生であってくれればと強く願う。粉塵の舞い上がりが心配。宅地中間の緑地も勿論芝生であり、その中央をドウダン若しくは腰×の緑木を上、宅地に近い前×は 1m 中位のアスファルトにして、散歩道にしてもと思う。出来たら幸せ！(×は判別不能)

●山なので冬の交通が少し心配です。

<お金>

●住宅ローン、交通、買い物

●あれから 4 年、夫婦共歳を重ねております。ローンの事を考えると不安がいっぱいです。子供達はまだ学生ですので、でも建てたい気持ちがいっぱいで…。頑張るつもりではありますが、移転後の生活の楽しみを考えながら生きて行こうと思います。

●家のローン、近所の付き合い

●お金で困ったりしないか等

<周辺施設>

●交通手段が不安、日常生活の生業と買い物等の不安、郵便局等がないこと

●前の場所よりも山の方にいくので、交通、お店、ATM があるか不安

5-3. 分析

2012年のアンケートおよびヒアリング調査から以下の4つの視点において分析を行い、合意形成過程の一つであるワークショップの成果と課題を把握した(表5-47)。

表5-47 ワークショップの成果と課題

【1】	ワークショップ手法の成果と課題
成果	ワークショップ手法による地域生成への住民の主体性・積極性の涵養
課題	参加しない・できない住民へのアウトリーチ／フォローアップ
【2】	社会的繋がりや相互扶助に関する成果と課題
成果	被災前の社会的繋がり、相互扶助の地域における価値共有
課題	被災後の状況変化、ライフスタイルの変化、世代間のギャップ
【3】	生活-空間関係における成果と課題
成果	被災前の生活-空間関係の継承
課題	避難所～仮設住宅～避難先といった震災特有の環境変化(環境移行)
【4】	将来へ向けたヴィジョンの構築に関する成果と課題
成果	地域の目標、コミュニティ再生へ向けてのヴィジョンの構築と共有
課題	被災者のリハビリと自宅再建のスケジュールとのギャップ解消

本節では、今回のアンケート調査と前回の調査を踏まえた上で、以下の4つの視点において、被災後4年を経た現在の生活実態や復興に向けての現状を分析する(表5-48)。

表5-48 分析の視点

【1】	集団移転に向けた現在の活動
【2】	移転地における社会的繋がり、相互扶助への期待と不安
【3】	自宅再建での生活-空間関係における模索と課題
【4】	将来へ向けた持続可能なヴィジョンの構築と課題

5-3-1. 集団移転に向けた現在の活動

ここでは、前回の調査で分析された集団移転計画に関わる住民ワークショップにおける住民の主体性・積極性という成果と、不参加者へのアウトリーチ／フォローアップという課題が明らかになった上で、現在自宅再建に向けた準備を始めている住民らの現状を分析する。

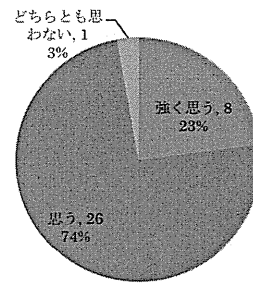
【現状】集団移転に向けた継続的、着実な準備

前回の調査からは、ワークショップに主体的に参加しているかという質問に対して、「強く思う」「思う」との回答が全体の86%であり、また、ワークショップの議論でよく発言しているかという質問に対しても、「強く思う」「思う」との回答が全体の47%、ワークショップで他人の意見をよく聞いているかという質問に対しては、「強く思う」「思う」との回答が全体の97%と、住民の主体的・積極的な参加態度が明らかになった(図5-49, 5-50, 5-51)。

今回の調査からは、現在自宅再建の準備の段階において、移転に向けた準備をしているかという質問に対し、「している」と答えた住民は全体の79%であり、また、その内容は「移転地を見に行く」「移転後の住宅について家族と話す」といったもので、集団移転に向けた継続的、着実な準備の様子が伺える(図5-52, 5-53)。

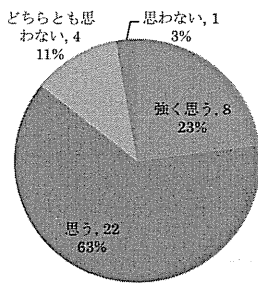
しかし、このような移転に向けた継続的、着実な準備は、現在の生活への不満の現れとも考えられる。現在の生活に対する満足度を伺う質問では、「どちらともいえない」

「あまり満足していない」が全体の67%であり、その内容の多くは仮設住宅の狭さを指摘するものであった(図5-54, 表5-55)。さらに、現在の生活の楽しみを伺う質問では、移転後の生活を想像することが多数を占めている(表5-56)。仮設住宅での生活をいち早く脱したいという思いが、移転後の生活への期待や準備につながっているともいえる。



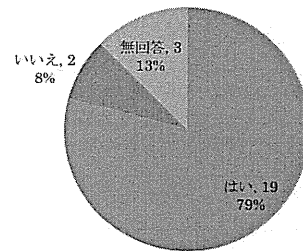
(N=35)

図5-51 ワークショップでの他人の意見の聞き取りの程度<2012年>



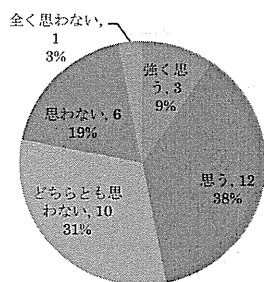
(N=35)

図5-49 ワークショップでの主体的な参加の程度<2012年>



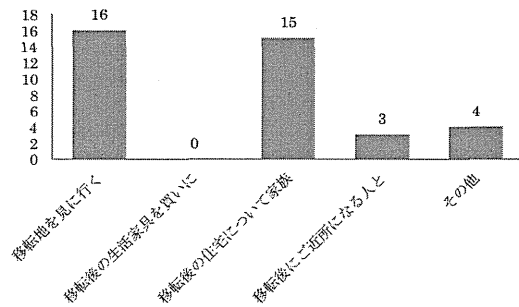
(N=24)

図5-52 集団移転に向けた準備の有無



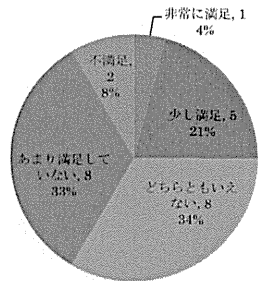
(N=32)

図5-50 ワークショップでの議論への参加の程度<2012年>



(N=38)

図5-53 集団移転に向けた準備の内容(複数回答可)



(N=24)

図 5-54 現在の生活の満足度

表 5-55 現在の生活の不満な点(自由記述)

〈仮設住宅に関する不満〉

- 仮設住宅も4年になると生活になれてしまう。このままでいいのかと不安をもつ。
- 仮設住宅がせまい。子供達も大きくなってきたので早く出たい
- 仮設住宅の不具合がちらほら出てきている。
- 生活用品が多くなり、仮設住宅がせまい。
- 仮設住宅なので隣の音が聞こえるし、聞こえていると思う
- 仮設の空室が目立って淋しい。早く自分の家で休みの日はお昼頃まで寝ていたい!
- 仮設住宅での生活なのでストレスがたまる。
- 仮設住宅なので狭い。冬は結露がすごくて天井等にカビがはえる。

〈近所付き合いに関する不満〉

- 近所付き合いが前より少なくなった。
- 近所付き合いが変。仮設と職場が離れている。
- 狭い

〈周辺環境に関する不満〉

- 部屋がせまく、収納が大変。せめて棚があったらと思う。環境は前が開け、海が見えてとてもよいと思う。買い物、食品関係は週に何車か来ているので、まあまあ助かるが、それ以外の買い物とか病院、役所への交通が殊同じ本吉町ながら小泉はJR(バス)の本数も少なく、車を持たない人、高齢者にはとても不便。近所付き合いはさして気にならない。

〈その他〉

- 不満を言えば…ですが、それほどないと思います。仮設の方々から比べれば幸せが大だと思います。
- 何の音も聞こえず山の中の一軒家の様な生活です

表 5-56 現在の生活の楽しみなこと(自由記述)

〈移転後の生活を想像する〉

●移転後の生活の楽しみ

●移転後の転居した後の生活

●早く自分の家を建てる。孫と一緒に住む。

●仕事でワークショップは参加出来ませんでした。それが心残りの気持ちが大きいです。現在は小泉にいますので周りも知り合いばかりであり不安もありません。子供達もそれぞれの生活が始まり、それが楽しみでもあり、心配でもあります。

●移転後の生活

●移転後のこと

●新しい家の想像

〈事業の進捗に関すること〉

●集団移転地の造成状況を見る

●自宅の新築

〈近所付き合い〉

●いろんな人との交流

〈家族との交流〉

●子供が早く帰ってくる事

〈外出〉

●外出の楽しみ

〈その他〉

●とても難聴の上、認知の夫をかかえているので、来て下さる方は歓迎しますが、自分からはあまり出向かない。イベントがあっても億劫に思う。市図書館から貸し出し車が来るので、それにいやされている。中学校仮設入り口に、中学校のドウダン並木と、ボランティアの方が来て一緒に植えた彼岸花があり、これからはその草取りをいたり、植えかえをしたり、小学校登口の花壇の草をつまんだり、自分なりに楽しんでいる。

5-3-2. 移転地における社会的繋がり、相互扶助への期待と不安

前回の調査では、小泉地区の被災前の社会的繋がり、相互扶助の関係が「隣人の生活スタイルの把握」「強固な信頼関係」「集落を越えた交流」「お裾分け」「日常的な声かけ」「家族同然の見守り」といったものであり、それらの関係がWSでも共有されたことが明らかになった。しかし一方で、被災後の状況変化やライフスタイルの変化、世代間のギャップといった大きな環境変化によって、それらの関係が失われた可能性があったことも明らかとなっている。そこで、現状の仮設住宅での生活および自宅再建の段階でもそれらの関係が継承されているのか、また、社会的つながりや相互扶助に対する住民の意識を分析する。

【現状】ワークショップでの社会的繋がり、相互扶助への手応えと、現在の生活から考慮されるそれらへの不安

前回の調査では、アンケートの自由記述で得られた回答およびヒアリングで得られた回答から、被災前の小泉地区の社会的繋がりとは「隣人の生活スタイルの把握」「強固な信頼関係」「集落を越えた交流」、相互扶助とは「お裾分け」「日常的な声かけ」「家族同然の見守り」といったものであり、それらの社会的繋がり、相互扶助がワークショップを通じて小泉地区の価値として再認識されたことが明らかになっている(表 5-57, 5-58)。さらに、ヒアリングで得られた回答から、被災前の社会的繋がり、相互扶助といった生活と、それらを担保してい

る空間の関係、すなわち生活-空間関係をワークショップで議論していった結果、移転計画においては、被災前の生活や空間をそれぞれ引き継ぐだけではなく、生活-空間関係を継承する計画がなされたことが明らかとなっている(表 5-59, 5-60, 5-61)。

今回の調査からも、移転後の生活で楽しみにしていることとして、「ご近所がほとんど顔見知りなので、あまり心配することがない。親しい友人も近くにいる」「以前のコミュニケーションを取り戻したい、昔の仲間と楽しく暮らしたい」「色々なイベントがあれば楽しいかな。朝の体操、いも煮会、ウォーキング」「近所で茶飲み」といった近所付き合いに関するものが多数挙げられた(表 5-62)。住民らは、ワークショップでの手応えを現在も持ち続け、移転後の社会的繋がりや相互扶助への期待を抱いているといえる。

しかし一方で、移転後の生活に不安があるかという問いに対しては、「非常にある」と「少しある」が全体の70%近くを占め、その内容は近所付き合いに関するものが多く挙げられている(図 5-63, 表 5-64)。これは、被災という常時とは異なる環境下での人間関係への不安によるものだと考えられる。前回の調査からは、被災後の状況変化や震災特有の環境変化による「避難状況の格差による人間関係の亀裂」といった問題があることが明らかになっている(表 5-65)。今回の調査からも、現在の生活への不満として、「近所付き合いが前より少なくなった」「近所付き合いが変。仮設と職場が離れている」といったような近所付き合いの減少を指摘するものがみられた(表 5-66)。住民らは、ワ

ークショップの手応えを感じている一方で、現在の仮設住宅での生活における近所付き合いの違和感や、避難所生活での人間関係の亀裂の経験から、移転後の社会的繋がり、相互扶助を不安にも感じているといえよう。

ワークショップの結果を住民が共有し直し、現状にフィードバックし続けることが重要

であり、移転後の生活においても、社会的つながり、相互扶助がどのような空間で担保されるのかを認識しながら生活することが重要であると考えられる。

表 5-57 被災前の社会的繋がり<2012 年>

<隣人の生活スタイルの把握>

「今までですと、隣の人がどこに行っているかもわかるんですね。変な話、その人の1週間の行動パターンというか毎週何曜日には病院に行っているなど、何年も住んでいる中でわかっていただけですが…(略)」(Mさん、40代男性)

<強固な信頼関係>

「結構ね、ほとんどだよ。新しい家建てたけど、家の鍵かけてたことなかったんだ。出かけてるときに誰か来てたら隣の住人から誰が来てたか教えてくれるんだ。よその人が見てくれてたから。のんびりみんな暮らして信頼し合っていたからさ。反面うるさい時もあるけどね。入れ替わり立ち替わり家に入ってくるからね。」(Tさん、70代男性)

<集落を越えた交流>

「私が住んでいるのは下町だったんですけど、下町、仲町、新町ってあるんですけど、みんな何かあると交流があるんだよね。葬式とかも部落はあるけどみんな来るんですよ。声を掛け合ってるんですよ。」(Sさん、70代女性)

表 5-58 被災前の社会的繋がり<2012 年>

<お裾分け>

「やはり高齢者っていうのは自分の家でとれた白菜とかを漬け物にするんですが、それが美味しいんですよね、買うよりも。すると、自分の家で食べられる以上に造ってしまうから、お裾分けとかもするんですね」(Oさん、50代男性)

<日常的な声かけ>

「もともと住んでる場所が2軒隣だったからいつも声をかけてたんですよ。」(Sさん、70代女性)

<家族同然の見守り>

「(Oさんが)一人暮らしだから、お風呂入る際にKさんちよって、今風呂入るからねって言うとお風呂に入るんですよ。ある日、お風呂入って、電気消さないまま茶の間でくつろいで、Kさんたちが『まだ電気消えてないぞ』って心配して中でどうなってるかわからないから、Kさんが奥さんと一緒に様子を見に行ったらテレビ見てたってさ。でもKさんは毎日やってみただよ。もう一人親が増えたみたいだって言うたね。」(Mさん、50代女性)

表 5-59 ワークショップによる小泉の価値認識<2012 年>

<コミュニティ概念の共有>

「(コミュニティという言葉にもいろいろ範囲や意味があると思いますが、住民のコミュニティに対する考え方は有る程度統一されているのでしょうか。)共有している期はしますね。ただ年代間での差はあると思います。どこでもいいという意見の方もいれば、あの人と一緒にいいという人もいます。」(Oさん、40代男性)

<小泉の良いところの再認識>

「小泉というまちについてそれほど考えたことはなかった、漠然と暮らしていたんですが、ワークショップを通してまちのことを考え直しました。…(中略)…(ワークショップで出た小泉の良いところや悪いところで、特に納得できたものはありますか。)近所付き合いだと思います。」(Oさん、40代男性)

表 5-60 被災前の生活や空間を継承することへの意志<2012 年>

●以前のような小泉地区が、被災後も協力心のある地区になってほしい。(80 代男性)

●被災後、小泉を離れていましたが、小泉に住むことを決めました。…(中略)…以前のような、人間関係や人のあたたかさが続くことを願っています。皆が安心して住める町を期待します。(40 代女性)

「この(ヒアリングを受けている)3 人とは離れたくないからさ、(移転先でもこの 2 人に)面倒みてもらうんだ。」(0 さん、80 代女性)

表 5-61 被災前の人間関係に合わせた宅地の空間構成への希望<2012 年>

「集団移転が出来て、宅地が決まって、知らない土地に行くようなものじゃないですか。…(中略)…その中で、今まで顔見知りだった隣近所が近くにいるとなると安心すると思うんですよね。」(0 さん、50 代男性)

「(移転先へは)やっぱり部落別に集まった方がいいね。」(0 さん、80 代女性)

「(移転先へは)お祭り人間が多く行くので、結構(多くの下町の人が移転先へ)行きますね。だからデッキを作ってほしいとかね。」(M さん、50 代女性)

表 5-62 集団移転後の近所付き合いへの期待

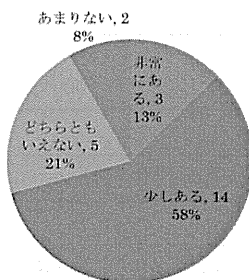
●ご近所さんが以前とはちがうので楽しみでも有り、不安でもあります。以前の家とはちがうのでそれは楽しみです。以前は古家でしたので。

●色々なイベントがあれば楽しいかな。朝の体操、いも煮会、ウォーキング

●どうしたら良くなるか、どうしたら住みよくなるか、人間関係がうまくやれそうか?家を建てた後のことが不安

●以前のコミュニケーションを取り戻したい、昔の仲間と楽しく暮らしたい

●ご近所がほとんど顔見知りなので、あまり心配することがない。親しい友人も知覚にいる。



(N=24)

図 5-63 集団移転後の生活に対する不安

表 5-64 集団移転後の近所付き合いへの

不安

●新しい集落の中でのコミュニケーション

●近所になる人との関わり、子供達が学校に通う通路の確保、交通の便

●隣にどんな方がくるかわからないので。

●近所付き合いについて

●今までの事と変わるので、隣、近所

表 5-65 避難状況の格差による人間関係の亀裂<2012 年>

「仮設住宅では、前よりも(付き合いが)減っています。近くに友達の仮設もありますが、2年経った今でも上がったことはありませんし、向こう(近所の人)が来てても玄関先で話して中には入らないです。行くのには気を使いますね。(行くのに気を使う原因は)物理的広さだと思います。」(Tさん、40代男性)

「仮設住宅ができた6月、(仮設住宅に)入れなかった人も沢山いた。すると(避難所の)体育館で(仮設住宅の抽選に)当たった人とそうでない人の間に亀裂が出来てしまった。…(中略)…もとの(小泉にあった)7つの自治会長が全員1回目の仮設住宅に当選し、それに裏があるのではということが言われた。…(中略)…仮設住宅に入居した今でも、避難所にいたときのいざこざが続いています。口に出して言う人はあまりいないけれど、集まりがあった時に『あの人のことは二度と信用しない』『仮設住宅の抽選会には策略があった』などという人がいたりする。」(Kさん、50代男性)

「集団移転した人たちと個別に家を建てた人たちとの関係が気がかりです。…(中略)…関係をどう作っていくのが難しいと思います。被災前からあった家と、被災後に個別に建てた家と、集団移転、3つにわかれてしまいますね。以前、個別に建てた人から、その間の関係だけはなんとかして欲しい、と言われたこともあるんです。」(Tさん、70代男性)

表 5-66 現在の近所付き合いへの不満 (自由記述)

<近所付き合いに関する不満>

- 近所付き合いが前より少なくなった。
- 近所付き合いが変。仮設と職場が離れている。

5-3-3. 自宅再建での生活-空間関係における模索と課題

前回の調査では、被災前にあった生活と空間を関連づけ、それぞれを引き継ぐだけでなく、生活-空間関係を継承する計画がなされたことが明らかになっている。ここでは、現在の自宅再建の現状および5-3-2で考察されたようなワークショップの結果が継承され、現在の自宅再建にもフィードバックし続けているかを分析する。

【現状】周囲をうかがいながらの慎重な自宅再建の検討

今回の調査から、自宅を決める際の注意事項として、「以前の住まいと似ている」「以前の住まいとは違う住まい方ができる」「家族関係の変化に対応できる」「人を自宅に招きやすい」がそれぞれ同程度存在しており、自宅を決める際に参考にしているものとし

て、「以前住んでいた家」「現在自宅再建をした人たちの家」「住宅相談会でのアドバイス」が多数を占めていることが明らかになった(図5-67, 5-68)。

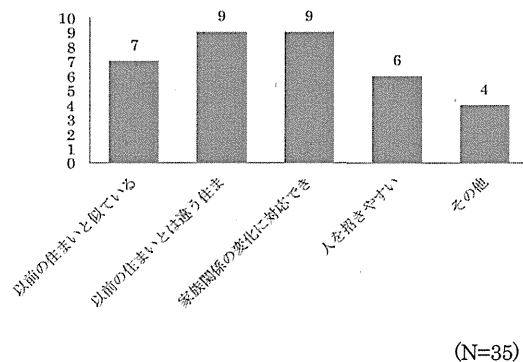
また、自宅再建の時期は2015年10月以降に集中していることが明らかになった(図5-69)。住宅相談会を担当する専門家にヒアリングを行ったところ、住宅相談会に参加する住民は少数で、参加せず周囲の流れに合わせていく住民の方が多数を占めていることが明らかになった。

一早い自宅再建が望まれる中、自宅再建が遅れてしまう要因は様々考えられるが、周囲の住民の再建の様子をうかがいながら自宅再建を行おうとしていることも挙げられる。ただでさえ住宅を建てるということは、自身の生活イメージをかたちにし、空間化していく大変な作業である。それに加え、今回の住宅建設は、新しいまちをつく

っていくという集団移転計画の中での自宅再建である。予算、発注先の選択肢、宅地との関係等、被災という見通しの不透明な状況下での決断は困難を極めるだろう。だからこそ、住宅相談会でのアドバイスや、先例を参考にしたいという周囲の住民の再建の様子をうかがう行為が出てきているといえる。

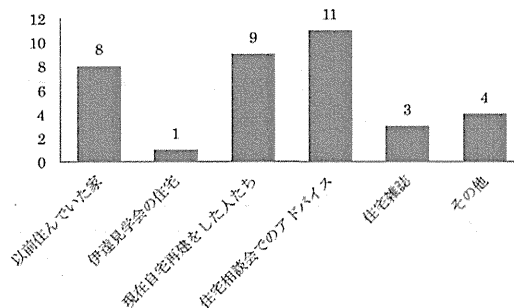
被災前の元の暮らしをいち早く回復することが望まれるが、集団移転とは新しいまちをつくっていくことであり、そもそも熟考が必要な時間のかかる事業である。住民の現状を尊重し、慎重な対応をしていくべきだろう。

しかしながら、住民が周囲の再建をうかがい、全体としての自宅再建のペースが遅れるのは望ましくない。住宅相談会に出席していない住民に対しての情報発信や出席してもらえそうな仕掛けづくりが必要だろう。



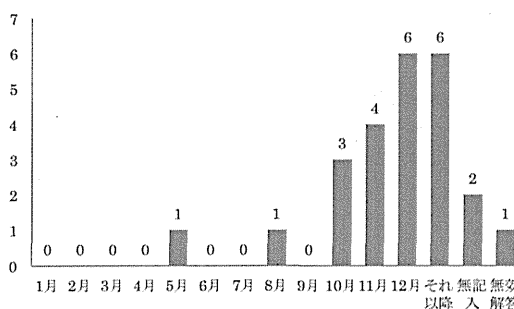
(N=35)

図 5-67 自宅を決める際の注意事項(複数回答可)



(N=36)

図 5-68 自宅を決める際の参考事例(複数回答可)



(N=24)

図 5-69 自宅再建の時期

5-3-4. 将来へ向けたビジョンの構築と課題

被災後の環境は現在でも刻一刻と変化している。ここでは、めまぐるしく変化する環境の中で、被災4年を経た現在、いかに将来へ向けたビジョンが構築されつつあり、また、その課題について分析する。

【現状】集団移転計画だけではない住環境全般に対する不安

今回の調査の移転後の生活で不安に思っていることとして、「子供のBRT、通学バス停が遠いのでは?」「小泉中は津田中と合併な様、孫(女)が中1となる。はて?どの道を通えば?どちらも山道。45号線にも遠くなる。我

が家では送迎も難しい。それがとても心配」
「交通手段が不安、日常生活の生業と買い物等の不安、郵便局等がないこと」「山なので冬の交通が少し心配です」「前の場所よりも山の方にいくので、交通、お店、ATMがあるか不安」といった交通の便や周辺施設に関することが挙げられている(表 5-70)。当然のこと

ながら、被災者にとっては集団移転計画だけではなく、復興事業全てが懸念事項である。集団移転計画における合意形成や情報伝達も重要だが、それ以外の事業にも目を向け、地域としての合意形成や情報伝達をしていく必要もあるだろう。

表 5-70 集団移転後の交通、周辺施設への不安

〈交通の便〉

●買い物など車の行き来、近い人との付き合い

●子供の BRT、通学バス停が遠いのでは？近所付き合いが上手くいくか？

●集団移転地が徐々進む中に思いついた事。当初か措置にて 29 年度、小泉中は津田中と合併なる様、孫(女)が中 1 となる。はて？どの道を通えば？どちらも山道。45 号線にも遠くなる。我が家では送迎も難しい。それがとても心配。売店が出来るのか、販売車が今迄通り来てくれるのか。山下ろしが相当強いだろうと。更地は芝生であってくれればと強く願う。粉塵の舞い上がりが心配。宅地中間の緑地も勿論芝生であり、その中央をドウダン若しくは腰×の緑木を上、宅地に近い前×は 1m 中位のアスファルトにして、散歩道にしようと思う。出来たら幸せ！(×は判別不能)

●山なので冬の交通が少し心配です。

〈周辺施設〉

●交通手段が不安、日常生活の生業と買い物等の不安、郵便局等がないこと

●前の場所よりも山の方にいくので、交通、お店、ATMがあるか不安

5-4. まとめ

被災 4 年を経た現状として、以下の 4 点が明らかとなった(表 5-71)。

表 5-71 分析から得られた 4 つの現状

【1】	集団移転に向けた継続的、着実な準備
【2】	ワークショップでの社会的繋がり、相互扶助への手応えと、現在の生活から考慮されるそれらへの不安
【3】	周囲をうかがいながらの慎重な自宅再建の検討
【4】	集団移転計画だけではなく住環境全般に対する不安

「集団移転に向けた継続的、着実な準備」
「ワークショップでの社会的繋がり、相互

扶助への手応えと、現在の生活から考慮されるそれらへの不安」からは、被災 4 年という状況を一連の被災経験で捉えることの重要性がみえてくる。すなわち、現在も続く仮設住宅の住環境の質の向上や、それ以前の避難状況の格差による人間関係の亀裂といった事柄が、被災 4 年を経た現状に強い影響を及ぼしているということである。継続的な調査を行い、一連の被災経験の中でのそれぞれの出来事の作用や役割を明らかにしていく必要があるだろう。特に、ワークショップといった集団移転計画が、一連の被災経験の中で被災者に及ぼす物理的・心理的な影響を把握すべきである。

「周囲をうかがいながらの慎重な自宅再建の検討」からも震災特有の状態が現れている。住民は被災の程度、経済状況、家族の問題等、それぞれが抱える問題や個人個人での文脈が全く違う中で、集団移転計画を進めている。特に、現在の自宅再建という段階では、そのような個人差が顕著に現れる。少しでも先例を参考にしたいと周囲の住民の再建の様子をうかがっているのかもしれないし、そもそも被災という見通しの不透明な状況の中で、どうすればよいのか判断できない状況なのかもしれない。被災前の元の暮らしをいち早く回復することが望まれるが、集団移転とは新しいまちをつくっていくことであり、そもそも熟慮が必要な事業である。住民の現状を尊重し、慎重な対応をしていくべきだろう。

「集団移転計画だけではない住環境全般に対する不安」からは、復興事業全体を俯瞰することの重要性が挙げられる。前回の調査からも、三陸縦貫道事業との調整が問題点として明らかとなった。様々な事業が複層的・同時多発的に行われる復興事業において、被災者の住環境の回復を第一とし、復興事業全体を総合的・統括的に判断していく必要がある。

以上のように、被災4年を経て、状況はより複雑化するとともに、それぞれの問題の根幹はより一層深刻化しているといえる。一連の被災という出来事の中で、復興事業全体を広い視野で捉え、分析を行っていく必要がある。

集団移転とは、新しいまちをつくってい

くことにほかならず、30年～50年先のまちのヴィジョンを明確にしていくことが求められる。ワークショップで達成してきた様々な成果は、「集団移転は未来への贈り物」という視点のもとで培われた意義のあるものである。被災4年を経た今だからこそ、今一度ワークショップで達成された成果を現在にフィードバックすることが重要だといえる。

6. まとめ

筆者は、宮城県気仙沼市小泉地区の集団移転へ向けての支援に継続して携わってきている。小泉地区は、被災間もない2011年4月に「小泉地区の明日を考える会」を結成した。同年6月には「小泉地区集団移転協議会」を設立し、被災直後の避難所生活の中で100世帯を超える地区住民の意向を集約、移転先の土地の候補を決めた。協議会が主催するワークショップやフォーラムは30回以上を重ねた。住民主導による集団移転計画の成果はそのまま大臣同意を得て事業化され、2013年6月には造成工事の着工となった(図6-1)。2015年5月に二次造成が完了し、災害公営住宅への入居も始まる見通しである。

小泉地区は、気仙沼市では第1期事業にあたる先行5地区の一つである。極めて順調なトップランナーと評されることもあるが、実際は幾度もハードルと向き合ってきている。造成着工後も苦戦を強いられてきた。例えば、小泉に限った課題ではないが、集団移転への参加者が大臣同意を得た時点に比べ大きく減ったことである。集団

移転希望者の減少と災害公営住宅希望者の増加に対応すべく、希望者が少なかった区画の一部を公営住宅用地とするなどの検討を行っていた。着工前に一度は宅地の割り当てが決まっていたにも関わらず、小泉の人々は再調整を厭わず、一つのコミュニティとしての再生を願い地道な協働を続けてきた。当初、世帯減少分は一次の粗造成で止める話であったが、市や国との密な協議の結果、新たな公園として整備できることとなった（図6-2）。小泉の人々は「クルドサック（袋小路）の道路で焼き肉をしよう」「新しい公園は共同畑として活かそう」などの話で盛り上がっている。

さて、小泉地区の防災集団移転および災害公営住宅を希望する被災者を対象とした2012年のアンケート調査では、ワークショップに参加したことがある住民は69%。31%の不参加の理由としては「時間が合わない」が最も多く、「遠い」「交通手段がない」といった開催場所への物理的な移動の制限、「情報がない」といった避難生活にお

ける情報伝達手段の課題が指摘された。

一方、ワークショップへ参加したことがある住民は、各回ワークショップについて「満足」「やや満足」との評価が全て8割を越えた。ワークショップの議論でよく発言しているかという質問に対しても「強く思う」「思う」で47%であり、参加者の二人に一人がワークショップの場で積極的に発言していることがわかった。また、ワークショップ内容を理解できているかについては、「強く思う」「思う」と答えた人が全体の97%となった。例えば、「目で地形や模型を見られて未来図が見え、地域の人々と会えて話げできた」「街づくり・地域・自宅の様子が具体的に想像することができ、共同使用場所についても多くの人の合意のもとに考えることができた」など、物理的な条件を視覚的に捉えるための工夫や住民同士の意見交換を重視するワークショップの進め方が、参加者の高い理解度に繋がったといえる。

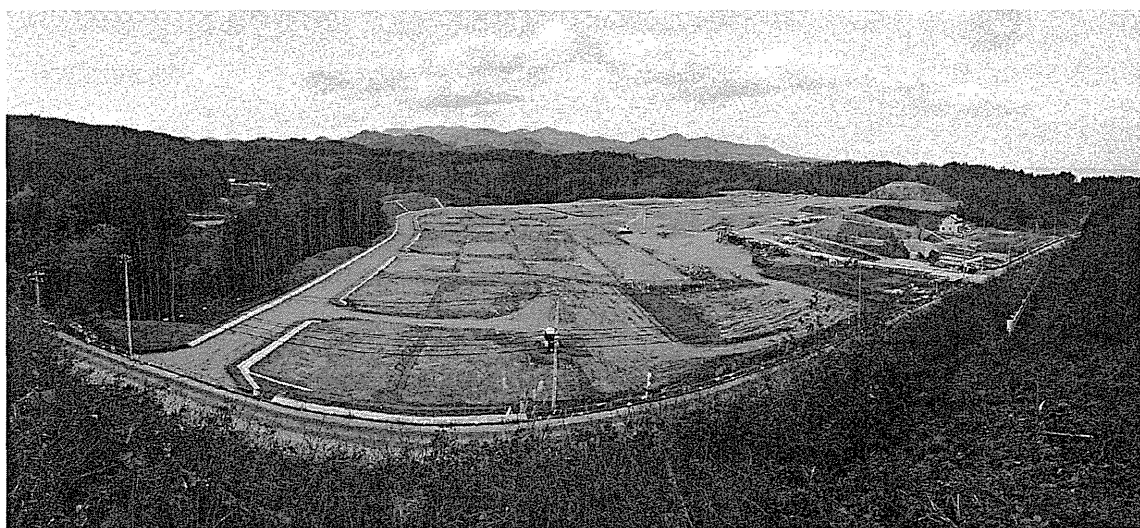


図6-1 小泉地区の造成工事の様子（2014年11月16日撮影）

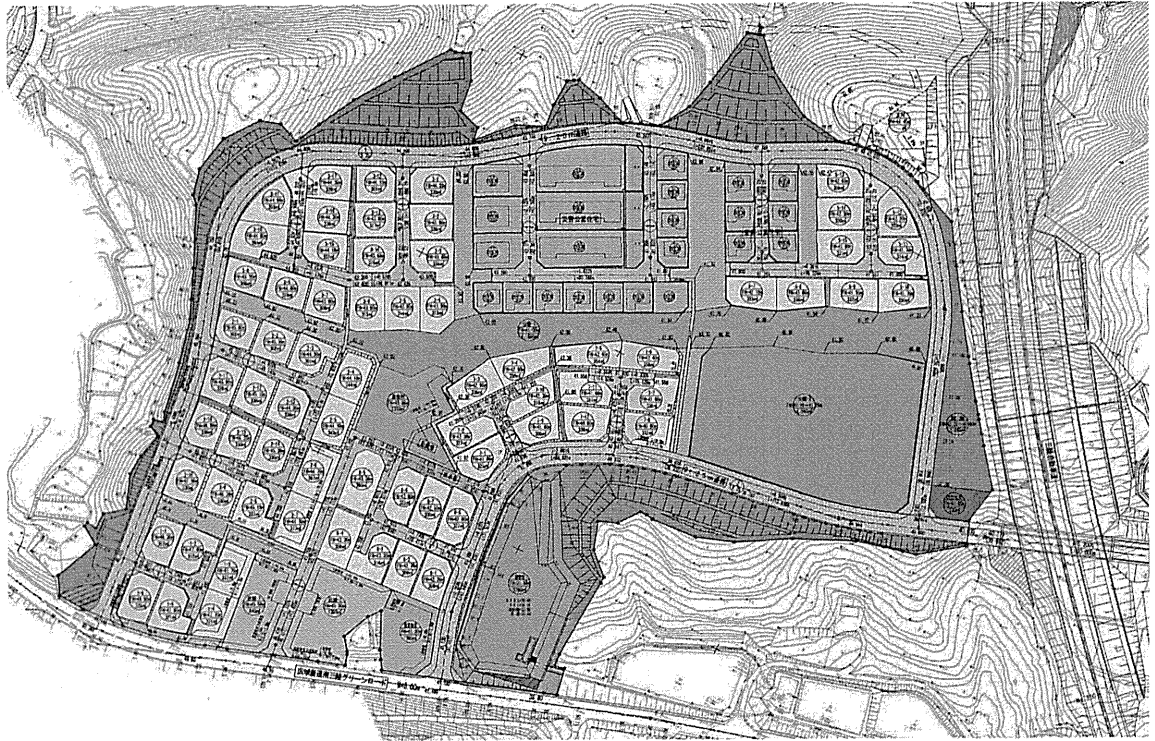


図 6-2 設計変更後の宅地計画 (2014 年 7 月 31 日)

小泉地区でのワークショップという手法は、確実に参加者の主体性・積極性の涵養へと結びついた。しかし一方で、不参加者が約3割であることに加え、その多くがそもそもワークショップ自体に関心がなく、何らかの不満を抱いていることも明らかとなった。「参加者を見ると、50代以上の方がほとんどです。1人暮らしの高齢者ならいざしらず、もっと若者の参加が望ましいと思います。将来、住むのは若者なのでから」との声もあった。ワークショップへは集団移転の建築主となる年配の世代が参加することが多く、若い世代の当事者意識を高めるための情報提供やコミュニケーションのあり方が課題として現れた。ワークショップという手法ではやはり、参加しない・できない住民に対してどのようなアウトリーチとフォローアップが必要なのかを

緻密に検討し準備することが重要である。

集団移転に関しては、小泉地区はある程度うまく合意形成のファシリテーションがマネジメントされてきたと評価できよう。しかし、復興関連の全ての事業で合意形成がスムーズであったわけではない。例えば防潮堤の建設についてである。小泉地区が面する中島海岸には14.7mの防潮堤が計画されている。その巨大さもあって、小泉地区は防潮堤建設でも全国から注目されることとなった。実は筆者は、小泉地区における防潮堤の議論には関わってきていない。むしろ、賛否へ関わる議論に対して一定の距離を取ってきた。なぜなら、筆者の専門は土木工学でも生態学でもないからである。そして、素人だからという理由以上に、特定の分野の専門家であるからこそ、異なる分野の専門性が求められる議論において専

門家面をすることは望ましくない、と考えるからである。

とはいえ、決して無関心ではない。防潮堤の是非は本当に難しい。結局のところ、将来の災害に対してどのようにリスクを取るのか、その判断である。その妥当性に客観的な正解は存在しない。科学的なデータはあくまで判断材料に過ぎない。では、そのリスクの取り方は誰が決めるのか。当然それは直接的な利害関係者である。つまり、将来の災害でダメージを受ける当事者である地域住民とその自治体である。関連の専門分野から示されるリスクの見込みを睨み、直接的な利害関係者がリスクの取り方を決断しなければならない。だからこそ合意形成が重要であり、そのファシリテーションの質が問われるわけである。

東北被災地へは、発災直後から様々な分野の専門家が駆けつけ、今なお多くの支援活動が継続されている。合意形成という意味では、特定分野の知識と技術を持った専門家が議論のファシリテーター役を務めることも少なくない。特にまちづくり分野においてはそれが顕著である。筆者が小泉地区の集団移転へ携わることができたのは、いうまでもなくその専門家であるからである。専門的な知識・技術をもって様々な意見やアドバイスを行い、時には船頭役も務めてきた。しかしそもそも、専門家の専門家たる技術と知識には、合意形成のためのファシリテーション能力が必須というわけではない。また、専門的な見解を示し助言を行うことと円滑な議論を促し総意をまとめることは、本来大きく異なる役割である。

ファシリテーターを兼務する専門家は、常に専門性を武器とした無意識な誘導に注意しなければならない。

防潮堤の議論も含め、復興まちづくりに関わる合意形成の大きな課題はファシリテーションである。特にボランティア的に被災地へ足を運ぶ専門家は、問題や困難を抱える被災地からの声に真摯にこたえようと行動する。“詳しい”専門家ということで助けを求められるが、往々にしてコンフリクトの調整役も期待される。繰り返すが、専門家は基本的にファシリテーション自体を専門としていない。職業として独立したファシリテーターも増えてきているが、ことに復興まちづくりにおいては、本来は民主的な手続きで選ばれた代表者にこそ、積極的に地域のファシリテーション役を務めるよう活躍してもらいたい。

ただ、復興まちづくりにおいて合意形成が不全になる多くのケースは、複雑な利害関係が絡む場合である。中島海岸の防潮堤がそれである。結局はケースバイケースで、ファシリテーションという機能をどのように担保するのかを、当事者が自覚的に確認し共有しながら事業をマネジメントしていく必要がある。小泉の事例だけで断言的に指摘はできないが、将来の災害に対するリスクを判断しなければならない当事者において、事業（組織、構造、システム）としてのファシリテーション機能への関心と自覚があるのかないか、それが合意形成の質とレベルを大きく左右するものだと省察している。

発表者名	論文題目	発表誌名	巻号	ページ	出版年
森傑	復興まちづくりにおける集団移転の課題	季刊消防科学と情報	118	11-14	2014
森傑	集団移転/復興まちづくりの合意形成とファシリテーション	ガバナンス	167	31-33	2015

□復興まちづくりにおける集団移転の課題

北海道大学大学院工学研究院 教授 森 傑

■住民主導の集団移転

宮城県気仙沼市小泉地区は、被災間もない2011年4月に「小泉地区の明日を考える会」を結成した。同年6月には「小泉地区集団移転協議会」を設立し、被災直後の避難所生活の中で100世帯を超える地区住民の意向を集約、移転先の土地の候補を決めた。協議会が主催するワークショップやフォーラムは30回以上開催され、住民主導による集団移転計画の成果はそのまま大臣同意を得て

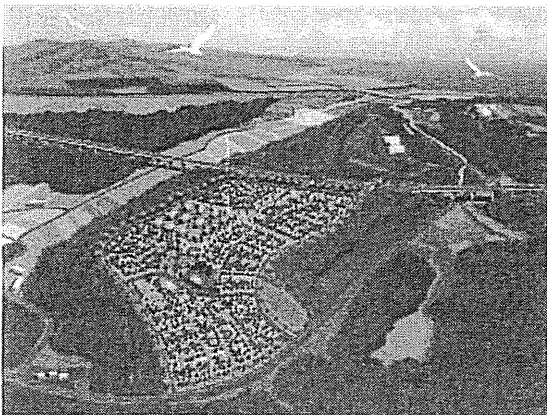


図1 小泉地区集団移転地の鳥瞰イメージ



写真1 造成工事現場見学会の様子(2014年9月5日)

事業化された(図1)。2013年6月に造成工事が着工(写真1)。2015年5月に二次造成が完了し、8月には災害公営住宅への入居が始まる見通しである。

ワークショップの議論で常に中心に定めてきたのは、小泉コミュニティとは何かである。初期の段階では、「小泉地区のよいところ」「よいところを引き継ぐアイデア」などのテーマで、各々の思いをポストイットに書き出しながら、地域での共有価値を丁寧に確認してきた(写真2)。小泉の

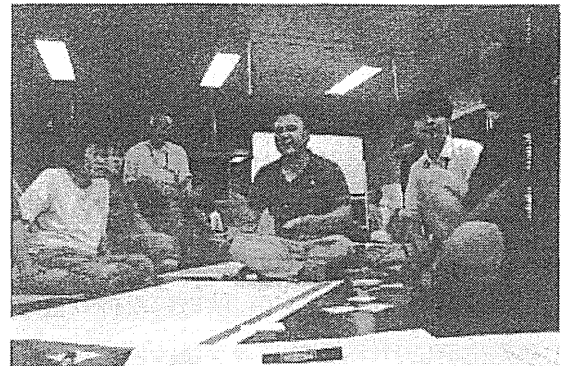


写真2 第3回ワークショップの様子(2011年8月30日)

人々が頻繁に言及してきたのが、共有空間のあり方である。例えば「共同作業」「近所付き合い」「家庭的繋がり」が重要なキーワードとして語られた。かつての小泉地区は短冊状の宅地割りで、道路からは短辺方向からアクセスする長細い敷地形状であったのだが、各宅地の敷地境界に沿って川から引き込まれた水路があったのが特徴である。小泉の人々には、その水路で野菜を洗ったり米研ぎや洗濯をしたりといった記憶が強く残っている。そして、道路→住宅→共有空間という配列が、小泉

コミュニティを支える基盤として、住民同士の豊かなコミュニケーションと繋がりを育んできたこ

とが、ワークショップを通じて再確認された(図2)。



図2 小泉地区の集団移転整備計画の骨子

■ワークショップの成果と課題

小泉地区の防災集団移転および災害公営住宅を希望する被災者を対象として、2012年にアンケート調査を実施した。その結果、ワークショップに参加したことのある住民は69%であった。31%の不参加の理由としては「時間が合わない」が最も多く、「遠い」「交通手段がない」といった開催場所への物理的な移動の制限、「情報がない」といった避難生活における情報伝達手段の課題が指摘された。

一方、ワークショップへ参加したことのある住民は、各回ワークショップについて「満足」「やや満足」との評価が全て8割を越えた。ワークショップの議論でよく発言しているかという質問に対しても「強く思う」「思う」で47%であり、参加者の二人に一人がワークショップの場で積極的に発言していることがわかった。また、ワークショップ内容を理解できているかについては、「強く思う」「思う」と答えた人が全体の97%となった。例えば、「目で地形や模型を見られて未来図が見え、地域の人々と会えて話げできた」「街づくり・

地域・自宅の様子が具体的に想像することができ、共同使用場所についても多くの人の合意のもとに考えることができた」など、物理的な条件を視覚的に捉えるための工夫や住民同士の意見交換を重視するワークショップの進め方が、参加者の高い理解度に繋がったといえる。

このように、ワークショップという手法は、確実に参加者の主体性・積極性の涵養へと繋がったと評価できる。しかし一方で、不参加者が約3割であることに加え、その多くがそもそもワークショップ自体に関心がなく、何らかの不満を抱いていることも把握できた。「参加者を見ると、50代以上の方がほとんどです。1人暮らしの高齢者ならいざしらず、もっと若者の参加が望ましいと思います。将来、住むのは若者なのでから」との声もあった。ワークショップへは集団移転の建築主となる年配の世代が参加することが多く、若い世代の当事者意識を高めるための情報提供やコミュニケーションのあり方が課題として現れた。ワークショップという手法ではやはり、参加しない・できない住民に対してどのようなアウトリーチとフォローアップが必要なのかを緻密に検討し

準備することが重要である。

■移転希望者の減少と対応

小泉地区は、気仙沼市では第1期事業にあたる先行5地区の一つである。極めて順調なトップランナーと評されることもあるが、実際は幾度ものハードルと向き合ってきている。造成着工後も苦戦を強いられてきた。小泉に限った課題ではないが、集団移転への参加者が大臣同意を得た時点に比べ大きく減ったからである。

具体的には、集団移転希望者の減少と災害公営

住宅希望者の増加に対応すべく、希望者が少なかった区画の一部を公営住宅用地とするなどの検討を行ってきた。着工前に一度は宅地の割り当てが決まっていたにも関わらず、小泉の人々は再調整を厭わず、一つのコミュニティとしての再生を願い地道な協働を続けてきた。当初、世帯減少分は一次の粗造成で止める話であったが、市や国との密な協議の結果、新たな公園として整備できることとなった(図3)。小泉の人々は「クルドサク(袋小路)の道路で焼き肉をしよう」「新しい公園は共同畑として活かそう」などの話で盛り上がっている。

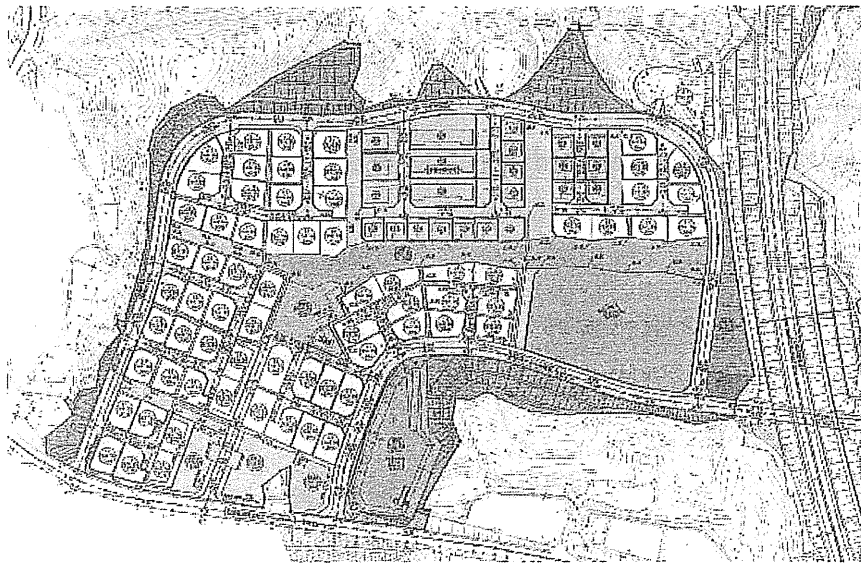


図3 設計変更後の宅地計画(2014年7月31日)

小泉地区にも当然、集団移転に参加せず、被災エリア外で以前から所有していた土地に自宅再建する人や、当初は集団移転に参加予定であったが様々な理由で自力再建を選択する人がいる。また、同じ小泉地区でも、そもそも被害が少なくこれまで通り自宅で生活できる人もいる。「集団移転した人たちと個別に家を建てた人たちとの関係気がかりです。それについて集団移転に参加している人から聞かれたこともあります。ある程度溝を作ってはいけなと思っています」や「自力再建といっても、集団移転のところの周りに自力再建

しており、全てを含めて小泉」のように、異なる立場の住民同士の関係維持は多少の困難を伴うものの、集団移転先のみならず、自力再建した住民やもとの自宅に住む住民も一丸となって、小泉コミュニティの新たな仕組みを検討する必要性が意識されている。

■変化に追従する事業マネジメント

被災地全般に見られる集団移転参加者の1~2割の減少は、決して予想外の事態ではない。むしろ